
つめたい夏の雨

のりあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つめたい夏の雨

【NZコード】

N4247D

【作者名】

のりあき

【あらすじ】

姉と弟の禁断ではない愛情物語り。人の死をひきずる感覺

(前書き)

はじめまして
つたない文章ですか最後まで読んで頂けると幸いです

ぼくは雨が嫌いだ。

特に夏に降る冷たい雨は気に入らない。

夏なのに雨のせいで肌寒く身震いがする

窓ガラスをたたく雨の音が一層強く鳴り響く
あの日の泣きたくなる記憶があたまに浮かぶ

未だに忘れられない、本当はもう忘れるべき姉のことを

7年前、姉は大学にさほど苦労もなく無事に合格して楽しく通っていた。

姉は子供のころから病弱で何回も入退院を繰り返して高校生のときは1年ちかくも入院した

おかげで同級生とははなれてしまい少しでも嬉しい思いもしたらしい。

姉は病院に入っているときはふさき込んでいたが、日頃はあかるい性格で特に弟の僕にはとてもやさしかった。
ぼくはそんな姉が好きだった。

姉弟という関係を越える領域まで近付いていた。
それほど仲がよかつた。

僕が産まれたころから姉はいつもつきつきりで、ミルクはおろか恥ずかしいはなしだがおむつがえまでしていくくれたらしい。
いつも思い出したかのような言い方で僕をからかっていた。
それを恥ずかしながら聞いていたが心の中では感謝していた。
そんな話している姉がたまらなく好きだった。

姉に恋心を抱くようになったのは中学に入ったぐらいからだ。

それまでは異性という感覚ではなくやはり姉弟の関係で一緒にお風呂にも入っていたぐらいだ。

進学してからは姉のちょっとした仕草や、ノースリーブから見える

脇の下などにビビリとしてしまい顔を赤らめてしまつたこともある。

姉もこちからを意識しはじめたのか付かず離れずと多少距離をおいてくれた。

それでも一緒に買い物に行つたり仲の良さは前よりも深くなつていつた。

姉の病気が悪化したのは夏にさしかかったころだ。

梅雨の長雨のせいか姉は体調をくずしてしまい、寝込んでしまつた。その時はまだ入院するほどでもなかつたが、ことのほか苦しかつたらしい。

ぼくは学校から帰つたらすぐに姉の部屋に顔を出していた。自分が出来る範囲内で姉の看病をしたかつた。

いやすつと姉の側に居たかつたのだ。

ぼくの両親は共働きで母は早くて毎朝5時までは帰つて来ない。それまではぼくと姉との大切な時間だつた。

姉はぼくの顔を見ると嬉しそうに微笑んだ。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「おかえり。朝よりもましになつたよ」

確かに朝見たときよりも顔色はよかつた。

まだ熱はあつたらしいのだがぼくと話すことド苦しいのが紛れたそうだ。

でもそんな日々は長くは続かなかつた。なかなか熱が下がらないために入院してしまつた。

当時ぼくは姉の病気のことをあまり詳しくなかつた。

姉は血液の病気でもう一度再発すると助かる見込みがないと言っていた。

まだドナーを待つてゐるのだが姉は滅多にない種類らしくあまり期待できなかつた。

そのことも姉が入院してから知った。

姉がいつも語りかけるようにそつと話してくれた。

自分のことをはつきりとわかつていて、なにかこう覚悟を決めてい
るみたいだった。

入院してわかつたことが姉は病気が再発してしまった。

病院は家から近くにあったのだが何度も会いにいけなかつた。

また姉がくるしんでる姿を見るのは嫌だつた。

会えば姉は無理してもいつものように笑顔で接してくれる。

体を起こすのも辛いのに。

姉の優しさに甘えてしまうときもあつた。

そんな時にかぎってたわいもない話で終わってしまつ。
ぼくのこころのはからまわり。

その年の夏はそれほど暑くはなかつた。逆に肌寒い日もあつた。
夏休みに入ったある日、母に姉の荷物を持って行くよう頼まれた。
夏に入つて仕事が忙しくなつたらしい。

ぼくは姉に会えることがうれしかつた

姉は病気のせいでやつれてしまい、苦しみが顔に出るようになつた。
それでもぼくが会いにいくと笑顔で迎えてくれた。

その日は体調がいいのかベットを起こして沢山のことを話していく
れた。

友達のこと、大学受験のこと、大学生活のこと、看護士さんのこと、
そしてこの時に病気と今後のことまではなしてくれた。

「からだけは大切にしてね、約束」と指切りました。

それはいまでも守つている。

そして姉はぼくにとつてとても大切で一生忘れられないことも話した。

姉はぼくが中学に進学してから変わつたと感じていた。でも理由も

わかつっていたそうだ。ぼくの「」の中までもあの笑顔がある」と
を。

「私はね、あなたが産まれたころから大好きだつた」

「あなたはわたしの生き甲斐」

「別に私が産んだわけでもないんだわけでもないんだけど」

「わたしの弟がわたしをたすけてくれる。そつといとおしく思つた」

「そしてあなたは私をたすけてくれた」

「ぼくはまだなにもしてないよ」

「ううん」 そういつて顔をふつた

「あなたがいる、それだけで十分」

「わたしのかわりにたくさん想い出をつくりて、でもわたしのことも忘れないで」

姉のベットの横で立つていたぼくをよびよせた

そつと姉の手がぼくの首筋にまわり、すつとながれるようにくちづけをかわした。

ぼくは目を見開いたままだつた。

するりと姉の手がはなれ短くて永いファーストキスの終わりがきた。

「あいしてる。でもごめんね」 姉は涙を流した。

姉のやわらかいキスの感触があたまに残りながらも、流した涙と「ごめんね」の意味を考えた。

その後、姉とは何度も会つてはいるがキスのことは触れなかつた。

あの日あのキスを交わしてから2週間後。

姉はぼくたち家族に見守られるなか息をひきとつた。

姉が亡くなつた日から葬式がすむまでずっとつめたい雨だつた。

この日からぼくは雨が嫌いになつた。

おわり

(後書き)

パソコンあるのにケータイで書いてみました。むつかしいなあこの小説は仕事で出張行つたあいだにかきました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4247d/>

つめたい夏の雨

2011年1月16日05時02分発行